

(明科町の埋蔵文化財第5集)

SAKURAZAKA KOYOUUSHI

桜坂古窯址

— 主要地方道穗高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告 —

1998. 3

明科町教育委員会

序

桜坂古窯址は、明科廃寺発見の昭和28年頃から古代の布目瓦等が出土することから廃寺のための古窯址ではないかと推定されており、昭和53年からの明科町史編纂の折の全戸調査でも出土した瓦類が寄せられ、ほぼ窯址の位置が判明しておりました。今回、主要地方道穂高明科線改良工事のため、窯跡の直下まで拡幅されることとなり、工事に先立ち調査を行うこととなりました。

今回の調査では窯本体の調査にはなりませんでしたが、現在の龍門寺北側周辺にあったと言われる白鳳時代の古代寺院（明科廃寺址）の創建のための瓦窯に関連した工房跡と考えられる住居跡や不良品を廃棄した灰原を調査することができました。明科廃寺瓦窯ではないかと考えられていました桜坂古窯址の実態の一端を明らかにすことができました。本書が今後活用され文化財保護と郷土の歴史解明の一助となることを期待いたします。

調査にあたり、初秋の暑さから初冬の寒さの中まで精力的に作業に打ち込んでいただきました調査団並びに作業員の皆様、調査にご理解とご協力をいただきました地元塩川原地区の皆様、松本建設事務所など関係各位に対し深甚なる敬意と感謝を申し上げます。

平成10年3月

明科町教育委員会

教育長 熊井秀夫

例　　言

1. 本書は主要地方道高明科線改良工事に伴い、明科町教育委員会が実施した明科町大字七貴塩川原に所在する桜坂古窯址の緊急発掘調査報告である。
2. 現場での調査は、途中中断をはさみ平成9年9月9日から同年12月9日までの期間で実施し、経費については、開発主体である松本建設事務所が負担した。
3. 本調査は、明科町教育委員会が主体となり調査団を組織し実施した。
4. 調査の記録にあたっては新平面座標系による測量座標を用いた。
5. 本書作成の作業分担は次のとおりである。

遺構　測量	大澤 哲、唐沢 政子、藤原 誠子、細尾みよ子、矢花 広子
トレース	大澤、山本 紀之、細尾
写真	大澤
遺物　洗浄、注記、復元、実測	唐沢、藤原、細尾、矢花、重田 恭子
トレース	重田、細尾
写真	大澤
編集	大澤、山本

6. 本書の執筆は大澤が行った。
7. 遺構実測図中使用のスクリーントーンはそれぞれの図中に凡例を示したが、土器の実測図に関しては、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器を示している。
8. 本調査の出土遺物、記録等は明科町教育委員会が一括保管している。
9. 発掘調査・報告書作成に当たり次の諸氏にご指導・ご援助をいただいた。記して謝意を表する次第である。
桐原 健、倉澤正幸、小林康男、島田哲男、直井雅直、原 明芳、樋口昇一、平林 彰、
山田真一、山下泰永

目 次

序.....	1
例 言.....	2
目 次.....	3
第1章 調査状況.....	4
1、調査の経過.....	4
2、調査体制.....	4
3、調査の概要.....	4
4、調査方法.....	5
5、過去の調査.....	5
第2章 遺跡の環境.....	8
第3章 遺構と遺物.....	10
1、遺構.....	10
(1) 住居址等.....	10
(2) 灰原.....	11
(3) その他の遺構.....	12
(4) まとめ.....	17
2、出土瓦.....	17
(1) 軒丸瓦・軒平瓦.....	16
(2) 丸瓦・平瓦.....	18
3、出土土器.....	41
第4章まとめ.....	45
写真図版.....	47
報告書抄録.....	56
奥付.....	56

第1章 調査状況

1、調査の経過

明科町大字七貴塙川原桜坂に所在する桜坂古窯跡遺跡は、以前から布目瓦が出土していることから中山山地の山麓段丘崖傾斜を利用して作られた古代の窯跡の存在が考えられており、明科町史編纂時の資料収集でこの窯の位置が特定され、また、昭和53年に林道開設によって発見された際ある個人の調査では近世末の窯と推定される窯跡1基の位置が確認されている。

この桜坂古窯跡の所在する山麓部分を通る主要地方道高明科線の改良工事が行われることになり工事により破壊される遺跡推定範囲内部分の記録保存のための事前緊急発掘調査を実施することとなった(第1図)。発掘調査は明科町教育委員会が工事主体者である松本建設事務所の委託を受けて調査団を編成し、平成9年9月9日から同9月19日までと同年10月21日から同12月9日までの期間で行い、その後明科町歴史民俗資料館に於いて報告書作成に向けた整理作業を行った。

2、調査体制

調査団長 熊井 秀夫(明科町教育委員会教育長)
調査主任 大澤 哲(明科町教育委員会 生涯学習係長)
調査員 関 全寿(町文化財調査委員)
 橋 具義(町文化財調査委員)
調査補助員 唐沢 政子、藤原 誠子、細尾みよ子、矢花 広子
調査参加者 内川 康子、金子 宏、小林 幹司、小林 善樹、
 高野 良孝、中村 勝利

事務局 明科町教育委員会 生涯学習課
 課長 山崎 正博、生涯学習係係長 大澤 哲、
 主査 小林 敬治

3、調査の概要

○ 検出された遺構

古代の窯跡に附隨する灰原	2ヶ所
住居址(工房址か?)	3軒
排水のための溝	2本
用途不明の周溝が巡る竪穴状遺構	1ヶ所
中世の火葬墓	2ヶ所

- 検出された遺物
須恵器、布目瓦、鶴尾?、円面硯、他

4、調査方法（第2図）

最初に新平面座標系による測量座標を使用して一辺5mの基本グリッドを設定した。各グリッドにはそれぞれ北から順に0～8、西から順にA～Dと任意に図面上に記号を割り振り、その交差する記号数字をそのグリッドのグリッド名とした。遺物とりあげにあたってはひとつのグリッドをさらに25分割して出土地点の位置特定の範囲の狭小化を計った。表土除去は重機によりを行い、擾乱の広がる北側半分はトレンチ調査とし1号住居が検出できたためその部分のみ拡張した。南側半分は遺構が残存していたため全面調査としたが、X=40435mより南は土層が擾乱されており調査を断念した。

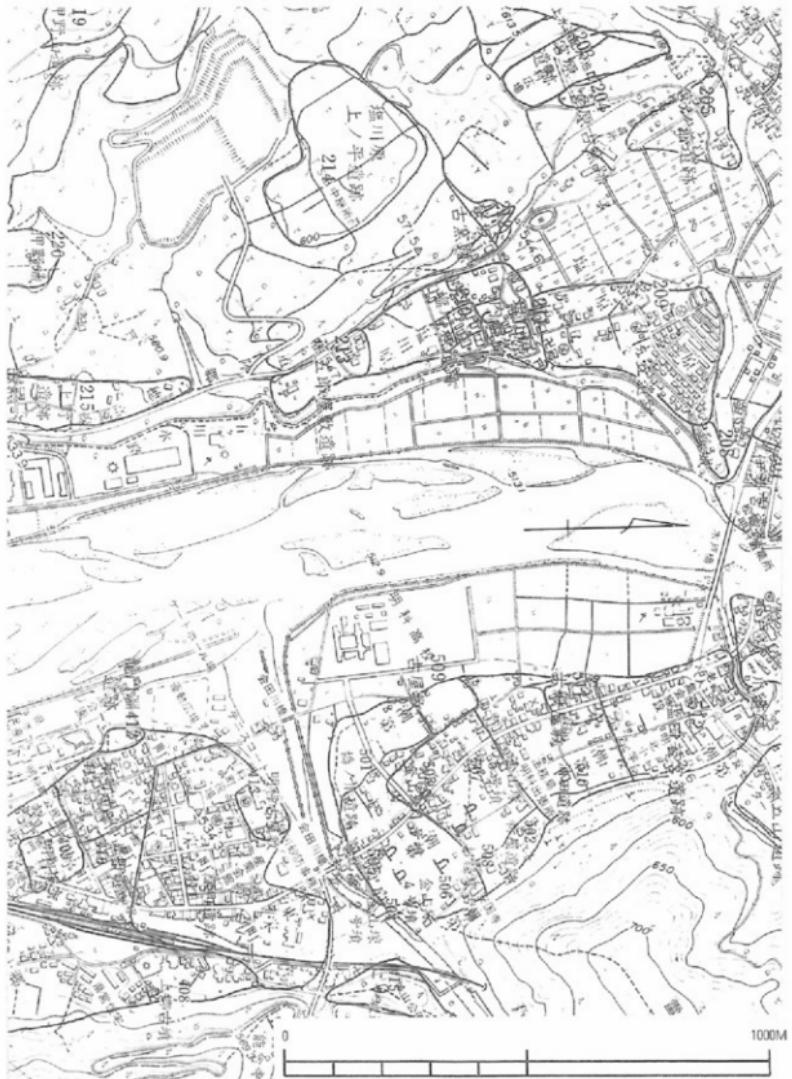
5、過去の調査

桜坂古窯址は、昭和48年3月刊行の『東筑摩郡・松本市・塙尻市誌』に「塙川原部落から南の中山山地の下端に2基が確認される。付近の凹地から湧水が見られ、緩傾斜地帯が桑園に利用され、灰原が擾乱されているので表面に須恵器が散乱している。ここからは布目瓦の出土も見られた。」と記されており、古窯址としてその存在を知られていたが、明科廃寺との関連を指摘する記述は見られなかった。

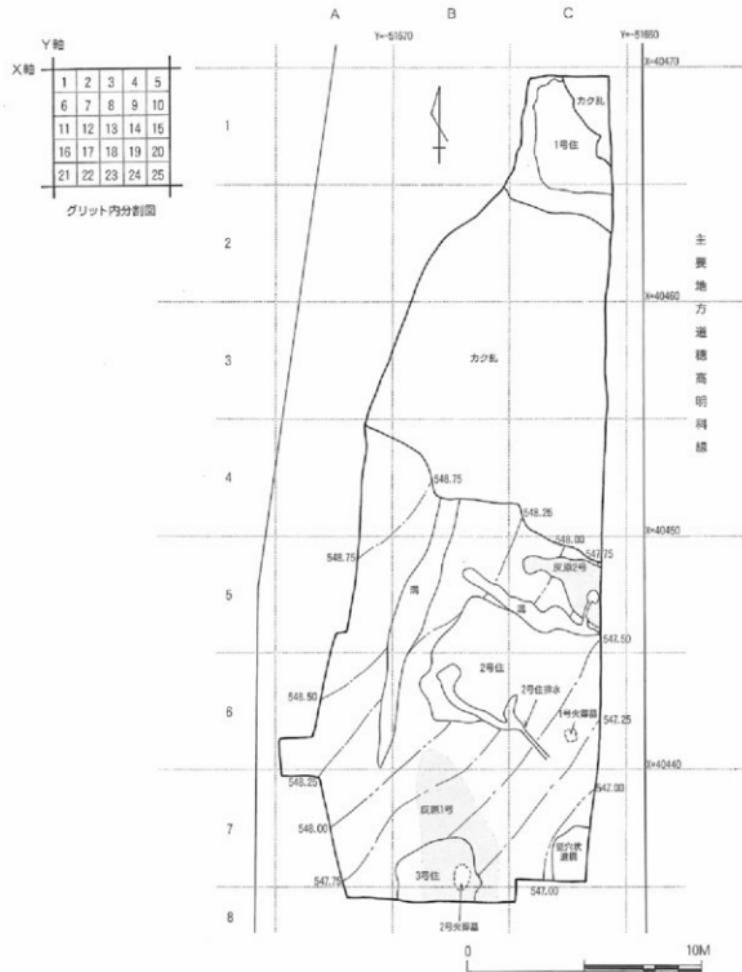
昭和53年から始まった明科町史編纂の折の資料収集で、今回の調査地区の所有者である堀内政氏より古窯本体のあったと思われる調査地点のすぐ西側の斜面にある畠から出土した丸瓦の提供を受けて、桜坂古窯址の具体的な存在が明らかになった。また、同年林道開設工事中にすぐ北側の斜面から近世末の小規模な穴窯址が発見され、短期間日常雑器が焼かれていたことがわかったが、桜坂古窯址が郡誌に記載の窯址と同じ窯址であるかについては確認できなかった。

また、昭和54年には、古代の窯址の存在が知られていた、桜坂から直線距離で300mほど北の宮原遺跡が荻原農村広場建設のために、信大学生等により発掘調査が行われたが、窯址のあると思われる地点ではなかったこともあり、須恵器等の若干の遺物が出たのみで遺構は発見されなかった。

昭和59年2月刊行の『明科町史』上巻ではこれまでの採集遺物を紹介し、桜坂古窯址、宮原古窯址とともに操業時期を平安時代をさかのぼることはないとし、平安時代に行われた明科廃寺の増改築や屋根瓦の修繕にこれらの窯址が利用されたとしている。また、明科廃寺の創建にかかる瓦は四賀村斎田原窯址群で焼かれたと推定している。（三好博喜『明科町史』上）



第1図 免査調査位置図



第2図 道構全体図

第 2 章 遺 跡 の 環 境

桜坂古窯跡は、およそ北緯36度21分59秒、東経137度55分16秒の位置にあり、標高545mで、東筑摩郡明科町大字七貴塩川原地区に所在し、犀川左岸の河岸段丘の段丘崖の斜面を利用して作られた古代の瓦陶兼用の窯址である。

松本平を流下する犀川は、明科町と穂高町の境で高瀬川、穂高川と合流し（三川合流）、右岸の松本市城山から続く筑摩山地と左岸の中山山地の間を曲流しながら善光寺平へと流れる。両岸には河岸段丘がよく発達していて、縄文時代以降の各時代の遺跡として現在に至るまで、人びとの生活の場として利用されている。桜坂古窯址は、この左岸河岸段丘上にあり、河道からの比高30mの低位段丘第2面で、対岸の明科段丘に対比される段丘上にあり、窯址は上位の段丘へと移行する段丘崖の斜面を利用して作られている。

桜坂古窯跡には、近世古窯址1基と古代古窯址1基の存在が以前から知られていた。今回の調査で7世紀後半から8世紀初頭に操業していたと推定される窯址が、調査地の西側斜面にまだ埋まっていることが明らかになった。同じ段丘崖斜面上に隣接する荻原地区には、数基の窯跡があったといわれる宮原古窯跡（204）があり、当時この周辺一帯で窯業が盛んに行われていたものと推定される。

桜坂古窯址と同時期の遺跡を概観すると、古墳時代では、潮古墳群の5基（503～507）、明科能念寺古墳群3基（416～418）、大足武士平古墳群2基（420・421）、明科上郷古墳（408）、押野上屋敷古墳（217）など6世紀以降に築造された小規模な古墳が確認されている。遺物の確認されている遺跡はいずれも5世紀以降で、5世紀代以降の祭祀遺跡と考えられる龍門源遺跡（412）、古墳時代後期の土器がみられることから現明科町役場から南方の龍門寺にかけて古墳時代の集落が想定される栄町遺跡（411）、律令期7世紀後半には明科廐寺（409）などが知られている。

平安時代には潮や明科地区はおそらく安曇郡前科郷川手里に属して国衙領であったと考えられ（倉科明正『明科町史』上）、現在の町並みのあるところには北から木戸橋ノ爪遺跡（515）、塩田若宮遺跡（512）、新屋遺跡（502）、潮橋ノ爪遺跡（501）、栄町遺跡（411）、本町遺跡（414）、県町遺跡（410）、上郷遺跡（407）など一連の大きな集落が営まれていた。

桜坂古窯跡のある七貴から陸郷小泉地区にかけては前科郷大穴里に属し平安時代後期永暦元年（1160）には大穴庄として藤原氏の庄園となっていたことが「高野山文書」に見え、鎌倉時代後期まで所有者を替えながら存続する。遺跡としては、小泉地区ではうろく屋敷遺跡（101）、竹原遺跡（104）、北原遺跡（106）、上ノ段遺跡（105）、棚平遺跡（107）などがあり、大穴神社のある中村地区では石原遺跡（113）が、荻原地区では宮原遺跡（203）、宮ノ前遺跡（205）、みどりヶ丘遺跡（209）、塩川原遺跡（210）、が知られている。

明科町全図



第3図 遺跡分布図

第3章 遺構・遺物

1. 遺構（第4図から第9図）

調査地区は、窯が築かれた傾斜地を整地して宅地とし、住居が建てられていたため、礫まじりの土層が広がり擾乱層がいたるところにあるなど遺跡としてはかなり破壊の進んだ状態であった。そのため遺構の確認は困難を極めたが、住居址3軒、灰原2ヶ所、住居址の排水施設1ヶ所、排水溝2本、堅穴状遺構1ヶ所、火葬墓2ヶ所を検出調査することができた。とりわけ、古代の瓦陶兼用窯の灰原が検出され、明科廃寺の瓦窯であることが確認できたことは大きな成果であった。

（1）住居址等

○ 1号住居址（第4図）

C-1グリットで検出。試掘トレーニングに方形と思われる落ち込みプランを確認したため、検出作業を行ったところ一辺4mくらいの方形堅穴住居址を発見した。北側は土手の生垣の下で木の根などが多く入っており擾乱でプランは判然としない。東側半分は道路により破壊されている。床面ははっきりしないが、粘土を貼り床している可能性がある。床面から15cm程の厚さで覆土が残存しているが、大砾とともに焼きの悪い平瓦や須恵器が出土しほぼ中央部では焼土・炭化材・土器が多量に検出された。カマドの東の焼土は厚さが2~3cmはありかなり火焼を受けていると考えられる。カマドの擁壁には平瓦や丸瓦を転用しており、煙道は判然としない。周溝内に遺物はない。須恵器製の鶴尾破片1点（第28図54）出土している。

○ 2号住居址（第5・6・7・9図）

B-5・6、C-5・6グリットで検出。一辺約5mの方形堅穴住居址と見られるが床面はしっかりとおらず斜面の傾斜によるためか東側半分は壁が検出できなかった。焼土層の広がりからカマドは西壁中央部にあったものと思われ、カマド付近の西壁には不良品瓦が擁壁として転用されている。西壁から南壁はテラス状になっており、そこに瓦破片や土器破片などの遺物が集中して出土している。テラス状の壁に沿って周溝が巡っており、それが丸瓦を転用した排水遺構につながっており、瓦や須恵器類の製作時に使用した水の排水のための施設と考えられ、この堅穴住居址は工房として使われていたと思われる。ピットが住居推定範囲内に相当数分布するが一般的な住居址とは異なるようで、住居に付随する柱穴などは不明である。B-6-8区から明科廃寺第一形式の花弁中央が回む素弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片が出土している。

○ 住居址の排水遺構（第5・6図）

C-6で検出された排水のための遺構で、2号住居址の南側の周溝からつながっており、2号住居址に伴う遺構と思われる。丸瓦を並べ連続させることで排水管の代用としている。中は土砂により完全に埋まっていたが丸瓦および土砂を取り除くと底部は硬く固められていた。

恐らく瓦や須恵器の製作時に使う水の排水のための施設と思われ、住居址の屋根の接

地部に設けられた施設で屋根に直接水が掛からないようにするための施設と思われる。この施設の東方は、急激に傾斜しており排水構造から60センチ程度下がった下方3.5mには用途不明の豊穴状の構造があり、その豊穴に向かって排水構造が続いている。

○ 豊穴状遺構（第6図）

C-7グリットで検出された遺構。現存部は2×1m程で他は破壊されており、壁際や中央部に溝が存在するなど用途不明の構造であるが、2号住居の排水構造がこの構造に続いているよう見えることから、排水を処理するための構造と考えられるが、排水処理とすればどのような意味があるのかわからない。窯業での水の使用としては、粘土の水築が考えられるが、排水が住居から続いていることから、室内での水築作業は考えられない。とすれば何のための施設なのかは判らない。

C-7-8区から明科廃寺第2形式の細素弁十二弁蓮華文軒丸瓦が出土している。

○ 3号住居（第5・6・7図）

B-7グリットで検出された住居址。一辺3.5mくらいの隅丸方形豊穴住居址で南側半分はすでに後世の住宅建設や耕作により破壊されているため調査区を南限として北側部分のみを調査した。カマドは焼土の広がりから東壁中央部にあったものと推定され不良品の瓦を擁壁として転用している。西壁には周溝がめぐり、カマドをかこむように溝が掘られている。ピットの位置から4本柱の住居が推定された。

3号住居址の廃絶後は、窯本体からの傾斜を利用して1号灰原が形成されている。住居址の窪みに大量の不良品が捨てられており、3号住居の遺物を特定することは難しい。1号灰原は更に中世に至って火葬墓が設けられていた。

（2）灰原

○ 1号灰原（第5・6図）

B-7グリットで検出された3号住居と範囲がほとんど重なるため、3号住居廃絶の後にその窪地が窯構築の際に出土した石や不良品等の捨て場となったものと思われる。窯本体があったと思われる2号住居西方の斜面から南方向へ傾斜を利用して灰原が形成されている。遺物が集中するのは長さ6m幅約4mほどの範囲で、窯本体から放射状に灰原が形成されている。

遺物はほとんどが焼きの脆い小破片ばかりで、図示できるものは限られている。

○ 2号灰原（第5・6図）

C-5グリットで検出された灰原遺構。北東方向に傾斜する窪地を利用して形成されている。排水溝もしくは2号住居に切られており、長さ約4m幅約3mの範囲に瓦・土器・石がちらばっており、他の構造や後世の造成などによりかなり破壊されており、残存状態は悪いが、灰原が形成された方向は確認できる。窯本体からまっすぐ東方へ灰原が形成されたと想定される。

C-5-8区からは四重弧文軒平瓦破片が出土している。1号灰原と同じく出土した瓦などの遺物のほとんどが焼きの脆く、小破片が多い。

(3) その他の遺構

○ 排水溝（第5・6図）

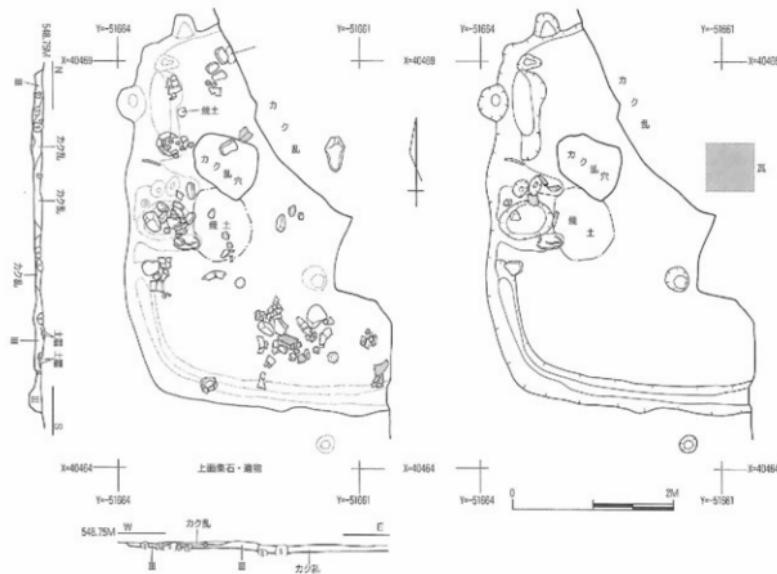
2号住居の西と北側にT字を描くように2本の溝が検出された。北側の溝は2号住居の壁がはっきりしないため切り合い関係が不明であるが、位置的に見て2号住居にともなうものと考えてもよさそうである。西側の溝は山の斜面上を流れ下る水の除去を目的にしていると思われ、これも位置的に見て2号住居にともなうものと考えられる。2号住居は住居内から外へ排水設備も設置しており、もしすべての溝が2号住居だった場合に排水にはかなり重点をおいている点が興味深い。

○ 1号火葬墓（第8図）

C-6グリットで検出された中世のものと思われる火葬墓。1m×40cmくらいの掘り込みがあり70cm×90cmの範囲に焼土が広がっていた。地山を掘り込んで炭と骨が多量に見つかり火葬墓と判断した。大腿骨らしい太い骨も見られたが、ほとんど小骨片が多く遺体の位置など確認できない。ほぼ中央の西側に古銭2枚出土。中央にある石は焼成を受けていない。

○ 2号火葬墓（第8図）

B-7グリットで検出された中世のものと思われる火葬墓。灰原1号を切っている。焼土粒・炭片・小骨片が広がっていたため火葬墓と推定した。石も焼成を受けている。



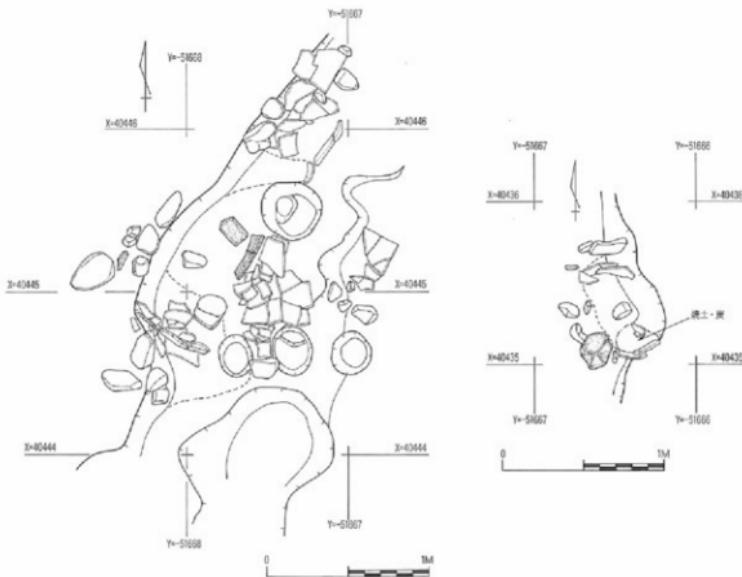
第4図 1号住居址



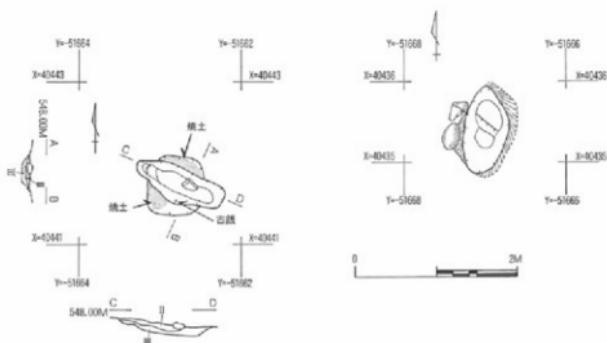
第5図 集石・遺物出土



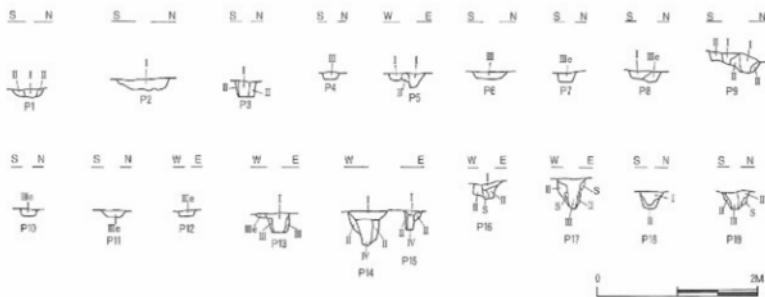
第6図 造構図



第7図 2号住居址(左)・3号住居址(右)カマド



第8図 1号火葬墓(左)・2号火葬墓(右)



第9図 2号住周辺ピットセクション図(水系高548.40M)

I	黒褐色土
II	黒色土 (II b 端黒色土)
III	地山を含む黒褐色土 (III b やや地山混入少ない III c やや暗く遺物少ない III d 明るく遺物多い III e よりIV層多く含む)
IV	地山

基本層序

(4) まとめ

以上今回の調査で検出来た遺構について概略を記したが、住居址は住居内に溝が配置されまた排水にも十分配慮されている点や、カマド構築にあたって焼成した瓦を使用している等の特徴をもつていて。これらは一般の住居構造とは若干相違するものと考えられる事からこれらの住居址は窯業に関わる工房址ではないかと推定された。灰原が2ヶ所あった事でこの灰原を形成した窯本体がすぐ近くにあることが確実となった。昭和53年の『明科町史』編纂に伴う資料収集で、この窯本体があったと思われる地点から(調査地区すぐ西側の畑) 耕作時に出土したという軒丸瓦の丸瓦部(第28図55)を地主から譲り受けている。もし今後窯本体の調査機会があれば、窯の操業時期をはじめ明科廃寺創建に関する大きな成果が得られるのではないかと考えている。

2. 出土瓦（第10図から第28図）

（1）軒丸瓦・軒平瓦（第10・11図1～10）

今回の調査では、軒丸瓦3点、軒平瓦6点が出土している。

明科廃寺出土の軒丸瓦については、昭和28年発見当時の石田茂作博士による白鳳様式・奈良様式・平安様式の3分類を受け、明科町史上巻（三好博喜1984）に瓦当文様による3形式の詳細な分類がされており、今回の出土品についても原則的にその分類に従うこととする。ただし、明科町史では石田博士の年代観はそのままに、意匠の差異をもとに3分類をおこなっている。本稿ではその年代観を踏襲することは、調査所見からは困難である。せいぜい数十年間という極めて短時間の窯の操業であることから、どの形式も7世紀第3四半世紀から8世紀初頭の極めて短期間に製造されたことになるので、年代観は別にして、意匠の違いによる3形式としての分類を踏襲し分類を行うとした。

1、2は灰原2号から出土した、明科廃寺第一形式の素弁八葉蓮華文の軒丸瓦である。既出の第一形式の軒丸瓦とは異なる特徴を持つ。周縁部が薄く圓線がない点は第3類と似るが、花弁の表現方法は陽刻的であること、第二形式と同様に周縁部と瓦当内区の間に太い沈線を巡らしている点が異なる。花弁の表現方法は陽刻的であることは第1類と同様である。焼成が不良で脆いため、詳細を観察することが困難であるが、蓮子は中房中央部に3つの蓮子が確認できるほか、その外側にも痕跡らしいものが見えるが確認できない。接着方法は、瓦当裏面に残る痕跡から恐らく接着法であると思われる。既出の第1～3類とは異なるため、第4類としたい。明科廃寺の既出遺物ではこのタイプの軒丸瓦は確認されていない。第1類と同様の花弁の表現方法が見られること、接合法が接着式であること等からすると、第1類から派生した形式と考えられ、その時期も1頃より若干遅い時期になる可能性があるが、明科廃寺既出の軒丸瓦では見られないことから、未調査の廃寺中心伽藍で使用された可能性があり、単なる補修瓦ではない可能性もあり、今後の一層の検討が必要である。

また窯本体と思われる場所からの既出の丸瓦（第28図55）はこの第4類の瓦當に接合するものと思われ、双方の接合部に接着法による接合の痕跡が認められる。別々に作った丸瓦と瓦當を生乾きの状態で接合し、瓦當裏面から粘土を厚く込めて指もしくは工具でナデによる調整をしている。丸瓦の凸面にも粘土を巻き工具等によるナデ調整をしているが、調整痕は瓦の焼成が極めて悪く観察が困難である。この丸瓦は窯本体と思われる場所からの出土品であり、出土状況の詳細は不明だが、恐らく窯の最後の操業時に残されたものと思われる所以、そうすると第4類の軒丸瓦は操業時の最終段階に生産されていた瓦ということになるが、調査所見では灰原2号はこの窯の古い時期の灰原であるので、そうするとこの窯の操業時期を通して生産されたことになる。

3はC-7-8地区の堅穴状遺構付近から出土した、明科廃寺第二形式第1類の軒丸瓦である。昭和28年の調査での既出のもの（『信濃』7-7第4図7）と1は同様の範傷がみられる。焼成時の収縮率が若干異なるが、範傷の位置と蓮子、花弁の位置が一致することから同範である。既出のものの範傷が若干小さく浅いように見えるので、製作の時期差があると思われる。

また、既報告では中房に1+8+12の蓮子とされていたが、既出遺物と合わせて詳細に

観察したところ、一番外側の蓮子の配置は12ではなく、16となるような配分の角度(22.5°)を示している。ただ、配列は均等とは言いがたく、間隔はばらつきが大きいのであるいは15の可能性もある。2列目の蓮子の配置は8となる角度で配分されているが、これも配置は不均等であり7の可能性もある。また、花弁はほど30°の角度で配置されていることから12葉となる。いずれも完形品ではなく瓦当全体がわかるものが出土していないので推測の域を出ないが、第二形式第1類は素弁12葉蓮華文で中房が広く蓮子は1+8+16となる。

接着方法は瓦の断面の痕跡からすると、嵌め込み式と思われ、作業台の上に瓦芯を置き、その全面に薄く粘土を詰め、そこに生乾きの丸瓦部を立て、裏面に粘土を詰め瓦当部と丸瓦部を接合し、裏面に丁寧な整形を加えている。丸瓦部はあらかじめ生乾きの時に、広端部を残して半切してあるものと思われ、残った丸瓦の広端部が凸帯として残らないように丁寧に整形を施している。

4は瓦当部の表現方法から第三形式に分類される軒丸瓦である。接着方法は断面の観察から嵌め込み式で、周縁部、瓦当はともに薄く作られており、周縁部と内区との間に細い沈線を巡らしている。恐らく瓦当部の作成時に瓦当範を用いていないと思われ、明科廃寺既出の第三形式の蓮弁の表現によく似たスタンプ状の型を押し当てて文様をつけようとしていると思われる。しかも一度ではなく複数回押し当てている痕跡が確認できる。灰原2号からの出土である。第三形式の軒丸瓦は瓦当部の製作に恐らく通常の瓦当範を用いていないものと思われ、廃寺既出のものも細いひも状の粘土を貼り付けて弧状に繋げ、中房が花芯となって中房から放射状に隆帯を伸ばして蓮華文を意識したと思われる文様を表現しており、4は内区の大部分を欠くため文様の全体はわからないが、隆帯による文様表現ではなく、弧状に連なる同様の文様をスタンプ状の型を押して表現しており、手法は異なるが文様の意匠は共通している。

この第三形式の瓦は、従来平安期の補修瓦とされていたが、この瓦の出土により、遅くとも8世紀初頭ということになり、極めて短時間に様々な意匠の瓦が生産されていたことになる。

5~10は重弧紋軒平瓦である。いずれも四重弧紋軒平瓦で、平瓦の凸面にもう1枚の平瓦を載せて接合し、12~13センチ余でヘラ切により切り落とし頸部をしている。端部はやや先のとがった工具で3本の沈線を引き四重弧紋をしている。側面はヘラ状工具により丁寧なヘラキリ調整が行われている。凸面の調整は横方向にヘラ状工具によるナデ調整が見られ、丁寧なつくりである。凸面、凹面共に側面付近はヘラ状工具での丁寧なケズリ調整が施されている。明科廃寺の既出遺物の軒平瓦は無頸の三重弧紋で、この四重弧紋の有頸軒平瓦は見られず、丁寧な作りであることから、過去の調査が行われていない廃寺の中心伽藍で使用されたものかもしれない。

今回の調査では、第一形式第4類、第二形式の軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が同じ窯で焼かれたことがわかり、製作時期、使用された伽藍などについて更なる検討が求められる。

(2) 丸瓦・平瓦(第11~27図11~53)

今回の調査では大量の丸瓦・平瓦が出土したが、出土した造構が不良品捨て場の灰原であったため、ほとんどの瓦は焼きが脆いか、高温焼成による変形したもので、しかも小破片が主であったため、洗浄・探拓・実測などの整理作業に耐え得る資料は数が限られていた。

丸瓦については、玉縁がついたものが確認できないことから、すべて行基式丸瓦と思われる。凹面には模骨痕の残るものが多く見られることから、粘土板桶巻き作りで作られたことが想定される。中には、ごく薄手で粘土紐を巻きつけたと思われるものもわずかに見られる（第17図24）。また、模骨痕のないものも見られるが、これは軒丸瓦用に丸太を使った杵を使用したものと思われる。凸面はヘラによる縦方向のケズリによる調整を施している。中には端部に横方向のケズリやナデを施したものも見られる。

平瓦は凹面に模骨痕や糸切痕が残るものがほとんどであり、のことから、桶巻き粘土板巻き付け作りによって製作されたことがわかる。凸面の調整は3種の叩き板による叩きの後、工具によるケズリやナデの調整が行われている。概観すると、二つの灰原によって凸面の調整方法に差異が認められたため、凸面の調整方法による下記のような分類を行った。

A 類 凸面に叩きだけで調整痕のないもの

- 1a 類・・・大きい縄目の叩き
- 1b 類・・・細かい縄目の叩き
- 2 類・・・平行叩き
- 3 類・・・菱形（連続V字型）叩き目

B 類 凸面に叩きの後工具による調整を施したもの

- 1 類・・・縄目の叩き
- 2 類・・・平行叩き
- 3 類・・・菱形（連続V字型）叩き

C 類 叩きの痕跡がみられず、工具を用いた調整だけを施したもの

- 1 類・・・ヘラ等の工具によるナデ・ケズリ
- 2 類・・・工具を使用しないで整形するもの

C類については非常に丁寧なミガキやケズリの調整がおこなわれており、叩きの痕跡はまったく残っていないので、あえて別の分類としたが、瓦の製造過程で当然叩き締めが行われているはずであるので、B類に含め、B類の丁寧な調整とすべきかもしれない。

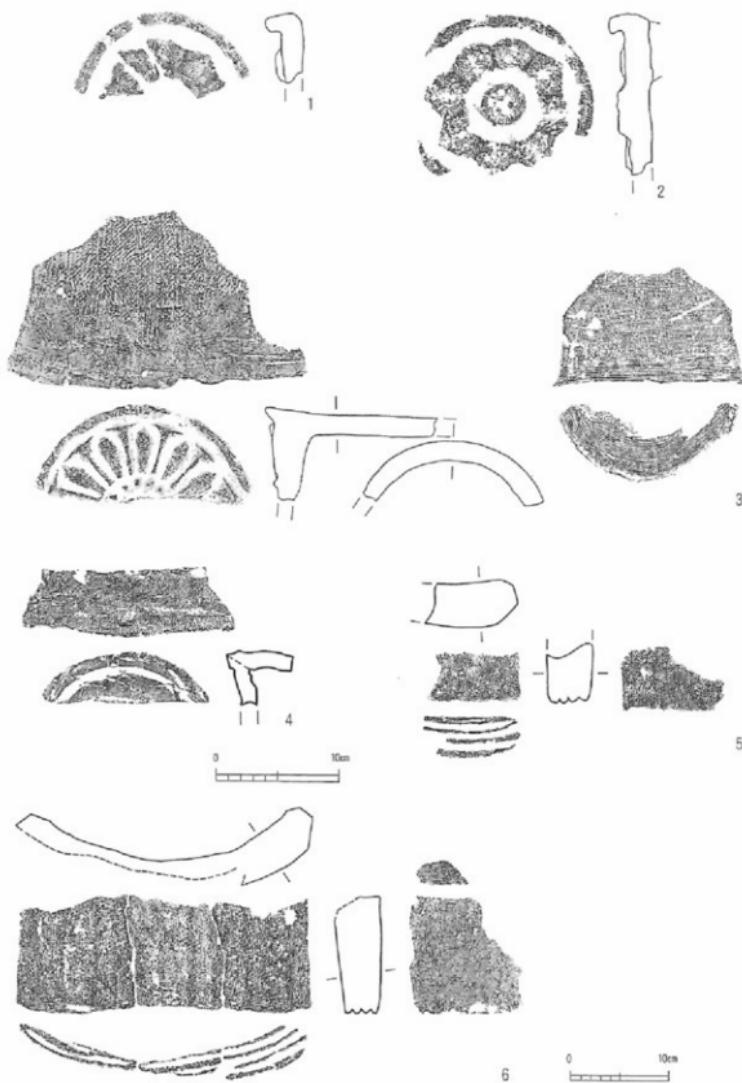
詳細な分類整理はできていないが、整理作業中の所見では1号灰原ではC類が多くを占め、2号灰原ではA類が多くを占める。調査の所見では、灰原の形成順は2号灰原→1号灰原であることから、窯の操業時期で瓦の調整方法が異なると思われ、叩きの後の調整しない瓦→叩きの後ケズリ、ミガキの調整を行う瓦に変化したと考えられる。更に、細部の調整も含めた瓦の製作技法について検討が必要であるが、丸瓦には叩き痕がそのまま残るものはほとんどなく、出来上がりを考慮し丸瓦は表になる凸面に調整を加えたと考えれば、平瓦の凸面（裏側）に丁寧な調整を行うということはどのような理由によるものか、使用した伽藍によるのか、あるいは別の理由なのか今後の課題としたい。

この分類は、とりあえず整理作業中の所見による暫定的な分類であり、今後更に詳細な検討を加え、併せて明科廃寺出土瓦等の整理により詳細な分類研究を行いたい。

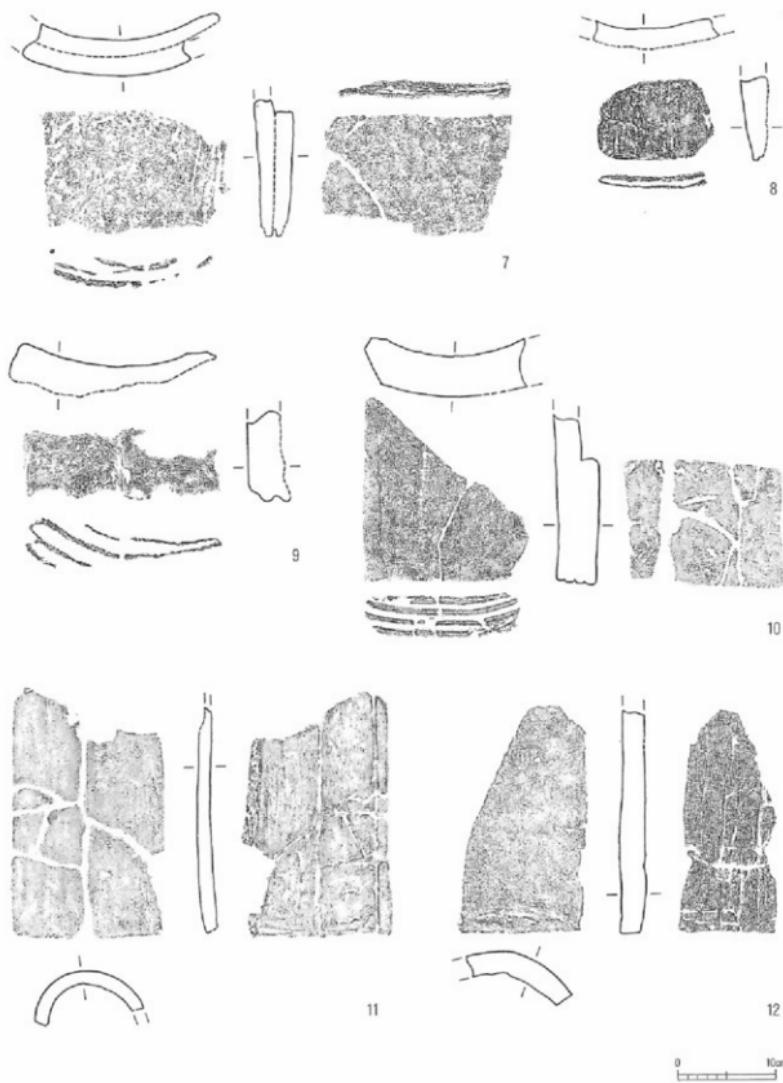
桜坂古窯址出土瓦観察一覧表

No.	出土場所	形	範	色	調	胎土	焼成	凸面	凹面	分類	注記	備考
1	灰原2号	軒丸瓦	灰質色	密	細粒含	不良				第1形式第4種	C地区	
2	灰原2号	軒丸瓦	にぶい黄褐色	密	細粒含	不良				第1形式第4種	C地区	
3	C-7	軒丸瓦	にぶい黄褐色	密		良好	純目タタキ 端部ヘラナデ	布目 端合部ヘラナデ		第二形式	O-7-8 №.109	
4	灰原2号	軒丸瓦	灰黄褐色	密	細粒含	良好	端部ヘラナデ	端合部ヘラナデ		第三形式	O-5-13, 15 黒土中	
5	灰原1号	軒平瓦	橙色	密	細粒含	良	ヘラカリ	布目、横骨痕		四重強文		
6	灰原1号	軒平瓦	橙色	密	細粒含	不良	ヘラカリ	布目、横骨痕		四重強文	B-7-23 灰原1号茶褐色土	凸面剥落多
7	灰原1号	軒平瓦	明黄褐色	粗	細粒含	不良	ヘラナデ	布目、横骨痕		四重強文	B-7-23 灰原1号Ⅲ層中	
8	灰原1号	軒平瓦	明黃褐色	密	細粒含	不良		布目、横骨痕		四面強文	灰原1号	凸面剥落
9	灰原1号	軒平瓦	にぶい黄褐色	粗	細粒含	不良		布目、横骨痕		四重強文	B-7-?	包含層上層
10	灰原2号	軒平瓦	橙色	密		不良	ヘラナデ ヘラカリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		四重強文	O-5-8 灰原2号	
11	灰原1号	丸瓦	灰白色	密		不良	縦ヘラケズリ	布目、端部ナデ		C-1	B-7-23 灰原1号茶褐色土	
12	灰原1号	丸瓦	墨灰色	やや粗い 細粒含		良好	横ヘラケズリ・ナデ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1	B-7-23 灰原1号	
13	灰原1号	丸瓦	にぶい橙色	密		不良	横ヘラナデ	布目、横骨痕		C-1	B-7-19 灰原1号	
14	B-7	丸瓦	墨灰色	密		良好	縦ヘラケズリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1	B-7-10 地山土上	
15	灰原1号	丸瓦	にぶい黄褐色	密		不良	縦ヘラケズリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1	B-7-18 灰原1号	かなり厚い
16	灰原1号	丸瓦	墨灰色	やや粗い 細粒含		良好	端部ヘラナデ 端部ヘラカリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1	B-7-24 灰原1号茶褐色土	
17	灰原2号	丸瓦	暗紅褐色	密		不良	端部ヘラナデ 端部ヘラカリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1	C-5-7 灰原2号	粘土板貼合せ痕
18	2号住	丸瓦	灰黄色	やや粗い 細粒含		良好	端部ヘラナデ 後縁ヘラナデ	布目、端部ヘラカリ		C-1		排水1
19	2号住	丸瓦	灰黄色	密		良	縦ヘラケズリ・ナデ 端部ヘラカリ	布目、横骨痕 端部ヘラカリ		C-1		排水2
20	2号住	丸瓦	灰黄色	やや粗い 細粒含		良	縦ヘラケズリ・ナデ 端部ヘラカリ	糸切痕 布目、横骨痕		C-1		排水7
21	2号住	丸瓦	橙色	やや粗い 細粒含		不良	端面荒れ著しい	布目、横骨痕 端部ヘラカリ				排水5
22	2号住	丸瓦	にぶい黄褐色	粗	細粒含	不良	端面荒れ著しい	布目、横骨痕 端部ヘラカリ			2号住	排水6
23	2号住	丸瓦	にぶい黄褐色	やや粗い		やや不良	端面荒れ著しい 端部ヘラケズリか?	布目、横骨痕		C-1		排水4 非常に薄い
24	2号住	丸瓦	にぶい赤褐色	密		やや不良	純目タタキ 端部ヘラナデ	布目、横骨痕、ケズリ		B-1	2号住 №.33 B-5-14, 19	薄手
25	2号住	丸瓦	淡黄色	密		不良	縦ヘラケズリ	布目、端面荒れている		C-1		排水3
26	2号住	丸瓦	にぶい赤褐色	密		良好	端部ヘラケズリ・ナデ 端部ヘラカリ	布目、横骨痕		C-1		排水3
27	灰原1号	平瓦	淡黄色	やや粗い 細粒含		不良	大きな格子型 端部近くはヘラナデ	糸切痕 布目、横骨痕		B-3?	B-7-18 灰原1号	
28	灰原1号	平瓦	灰黄色	密		やや不良	横ヘラナデ	糸切痕 布目、横骨痕		C-1	B-7-23 灰原1号茶褐色土	
29	灰原1号	平瓦	橙色	やや粗い 細粒含		良	大きい平行印き 後縁ヘラナデ	糸切痕 布目、横骨痕		B-2	B-7-19, 20	
30	灰原1号	平瓦	にぶい褐色	粗	細粒含	良好	端部ヘラナデ 端部ヘラカリ	糸切痕 布目、指によるナデ		C-1	B-7-18 灰原1号茶褐色 土	
31	灰原1号	平瓦	にぶい黄褐色	密		不良	端面荒れ著しい	糸切痕 布目、横骨痕		C-1	B-7-23 灰原1号Ⅲ層	
32	灰原1号	平瓦	にぶい黄褐色	密		不良	端面荒れ著しい	布目、横骨痕		C-1	B-7-17 灰原1号Ⅲ層中	
33	灰原1号	平瓦	にぶい橙色	やや粗い 細粒含		良	横ヘラナデ	糸切痕 布目、横骨痕		C-1	B-7-23 灰原1号Ⅲ層 茶褐色土	
34	灰原2号	平瓦	にぶい橙色	やや粗い		良	太綱目叩	布目、端部ヘラケズリ		A-1a	C-5-7 灰原2号	
35	2号住	平瓦	橙色	密		不良	平行叩	糸切痕 布目、横骨痕		A-2	B-5-19 2号住 №.28	
36	2号住	平瓦	灰黄色	密		良	菱形叩 端部近くヘラケズリ	糸切痕 布目、横骨痕		B-3	B-6-2 2号住カマド	
37	2号住	平瓦	橙色	密		やや不良	菱形叩 端部ヘラケズリ	糸切痕 布目、横骨痕		B-3	B-5-14, 19 2号住	

No.	出土場所	形 貌	色 調	焼 成	凸 面	凹 面	分 類	注 記	備 考
38	2号住	平瓦	黒褐色	密	良好 平行印 端部ヘラナデ・ケズリ	糸切り痕 布目、横骨痕	B-2	B-5-23 2号住 №36	
39	2号住	平瓦	黒褐色	密	良好 平行印	糸切り痕 布目、横骨痕	A-2	2号住力マド №3	端部に平行タタキ
40	2号住	平瓦	黒灰色	やや粗い 粒粒含	不良 器面荒れ 端部ヘラナデ	糸切り痕 布目、横骨痕 端部ヘラキリ	C-1	B-6-9, 10 2号住 №5	
41	2号住	平瓦	橙色	やや粗い 粒粒含	やや不良 細平行印	糸切り痕 布目、横骨痕	A-2	B-5-23 2号住 №25	
42	2号住	平瓦	橙色	密	不良 細平行印	糸切り痕 布目、横骨痕	A-2	B-5-19 2号住 №30	
43	2号住	平瓦	橙色	密	不良 菱形印 端部ヘラキリ	糸切り痕 布目、横骨痕	A-3	B-5-19 2号住 №29	
44	2号住	平瓦	にぶい黄褐色	密	良 横ヘラナデ 端部ヘラズリ	糸切り痕 布目、横骨痕 端部ヘラキリ	C-1		
45	2号住	平瓦	橙色	やや粗い 粒粒含	不良 菱形印	糸切り痕 布目、横骨痕	A-3	B-6-2 2号住力マド№12	
46	2号住	平瓦	橙色	密	やや不良 菱形印	糸切り痕 布目、横骨痕	A-3	B-5-14, 19 2号住力マド№17?	
47	2号住	平瓦	橙色	密	不良 菱形印 端部ヘラケズリ・キリ	糸切り痕 布目、横骨痕 端部ヘラキリ	A-3	B-5-14, 19 2号住 №27	
48	C-5	平瓦	橙色	やや粗い 粒粒含	不良 器面荒れ 横ヘラナデ	糸切り痕 布目、横骨痕 端部ヘラキリ	C-1	C-5-22 №13	
49	C-7	平瓦	黒褐色	密	良 菱形印	糸切り痕 布目、横骨痕 端部近く端目印	A-3	C-7-8 №109	側面、上側 切口?!にタタキ
50	C-5	平瓦	にぶい黄褐色	密	良 横ヘラナデ 端部ヘラズリ	糸切り痕 布目、横骨痕	C-1	C-5-22 №34	
51	C-7	平瓦	黒灰色	やや粗い 粒粒含	良好 横ヘラナデ 端部ヘラケズリ	糸切り痕 布目、端部ケズリ	C-1	C-7-18 豎穴状造構内東 壁	
52	C-7	平瓦	黒灰色	やや粗い 粒粒含	良好 太平行印 横ヘラナデ	糸切り痕 布目、横骨痕	B-2	C-7-18 豎穴内北壁、北 側	
53	C-6	平瓦	褐灰色	やや粗い 粒粒含	良 横ヘラナデ 指痕	糸切り痕 布目	C-1	C-6-24 №109	
54	1号住	跡尾?	黒灰色	良 端部ヘラズリ				1号住 №7	
55	窓跡	軒丸瓦	浅黄緑		不良 器面剥落著しい 端目印か?	器面剥落著しい			窓跡本体より出土 提供品 軒瓦部は剥落し残つ ていない 接合法は接着式



第10図 灰原 1 号出土軒丸瓦 (1, 2) C地区出土軒丸瓦 (3, 4) 灰原 1 号出土軒平瓦 (5, 6)

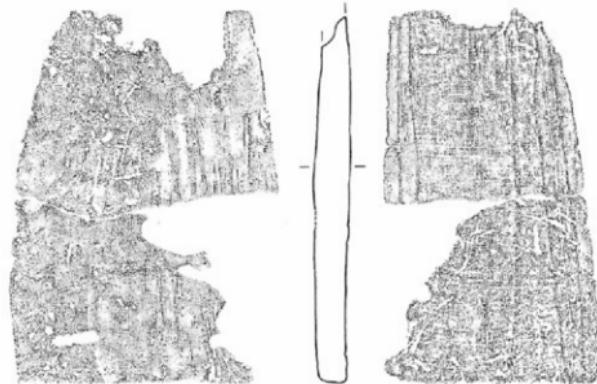


第11図 灰原1号出土軒平瓦(7~10) 灰原1号出土丸瓦(11,12)

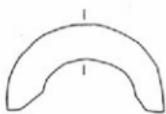


13

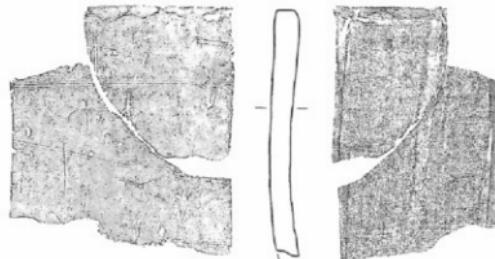
14



15



第12図 灰原1号出土丸瓦（13～15）



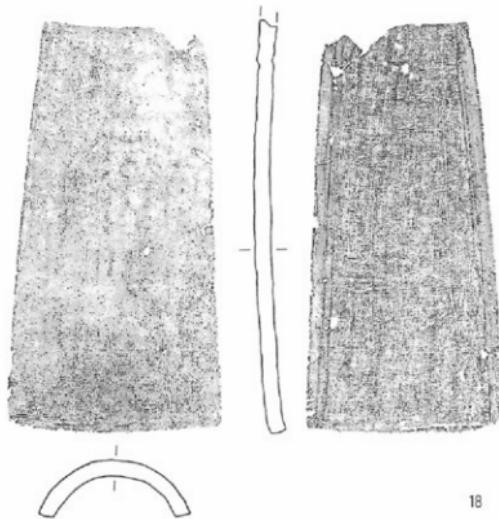
16



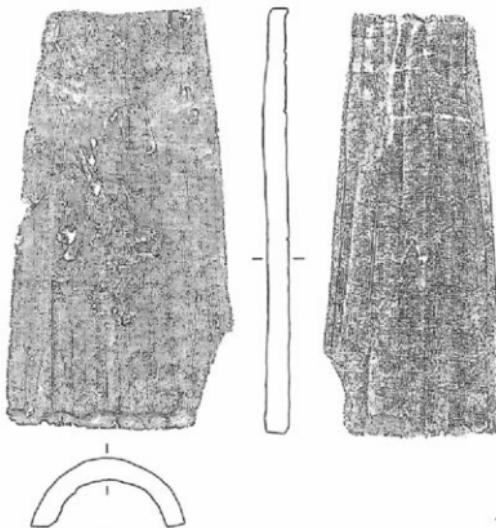
17



第13図 灰原 1 号出土丸瓦 (16) 灰原 2 号出土丸瓦 (17)



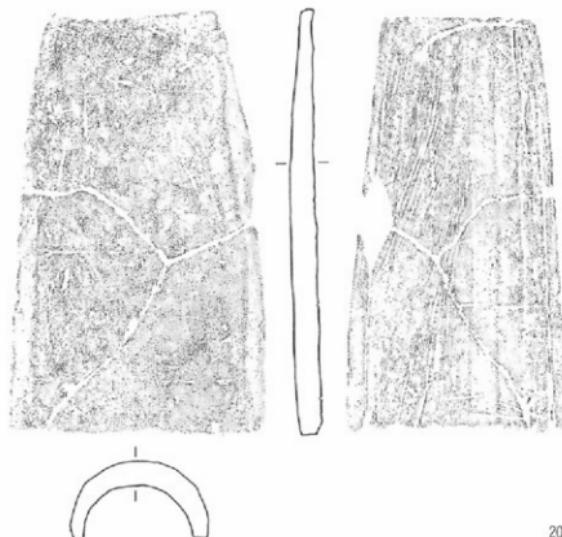
18



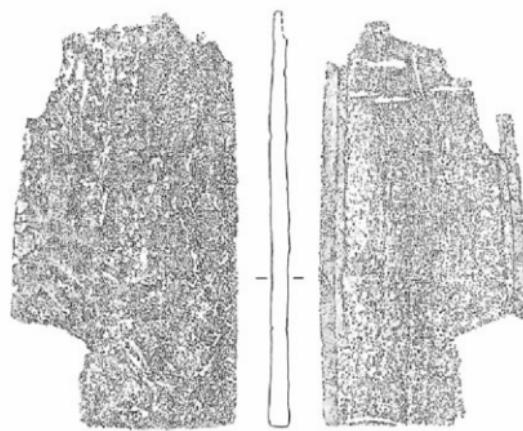
19

0 10cm

第14図 2号住出土丸瓦



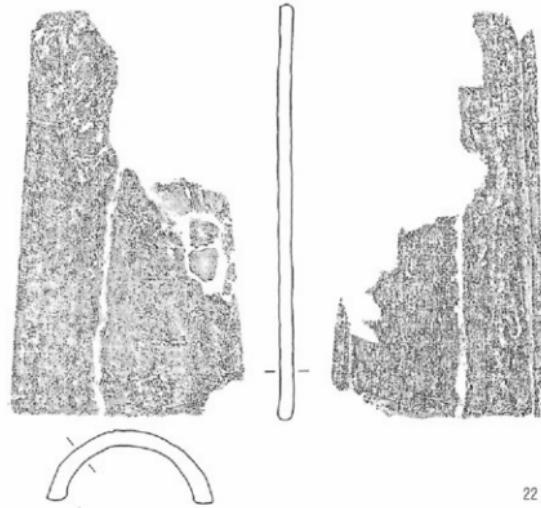
20



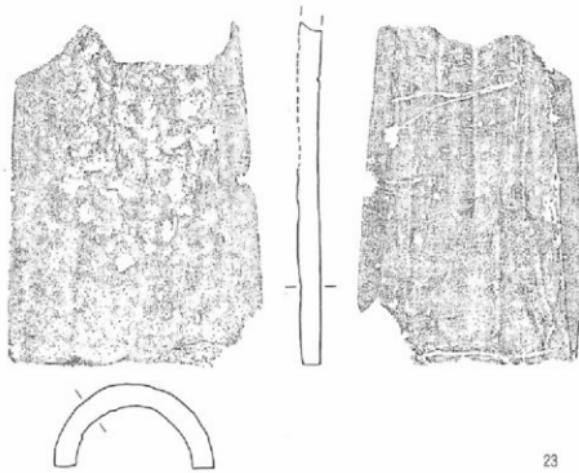
21



第15図 2号住出土丸瓦



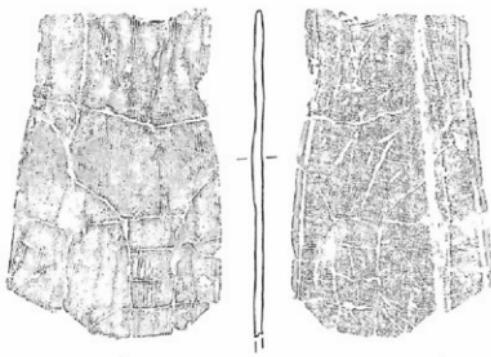
22



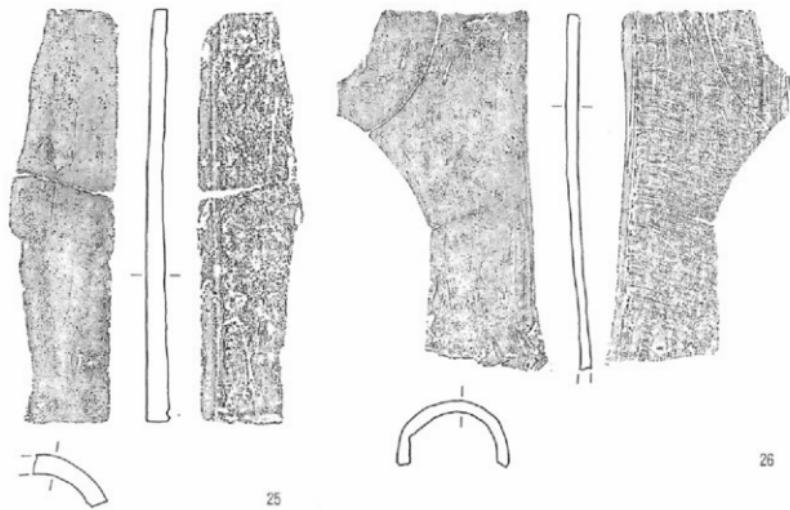
23



第16図 2号住出土丸瓦



24

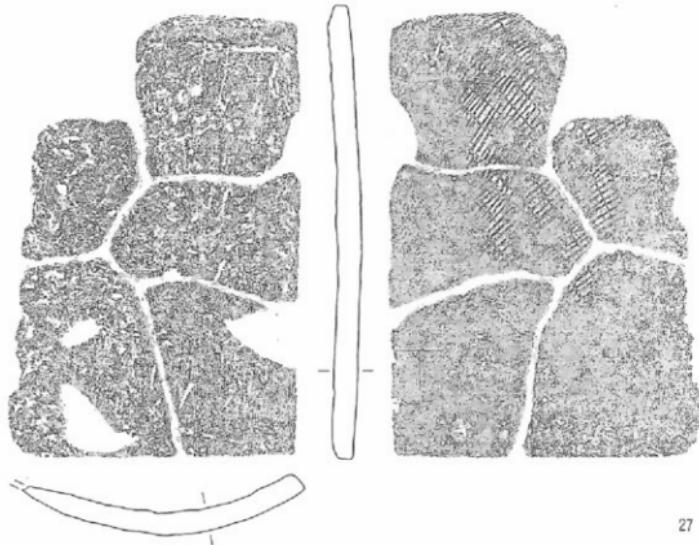


25

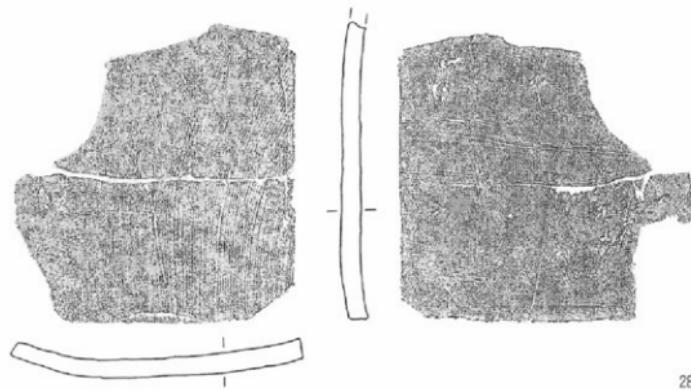
26



第17図 2号住出土丸瓦



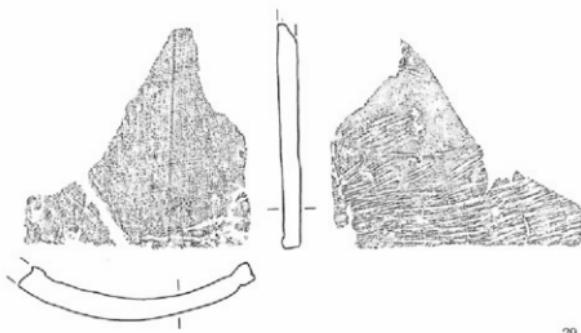
27



28

0 10cm

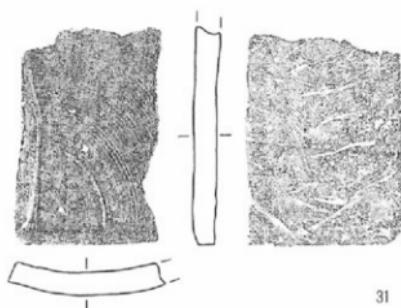
第18図 灰原 1号出土平瓦



29



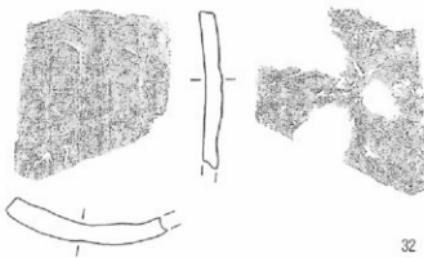
30



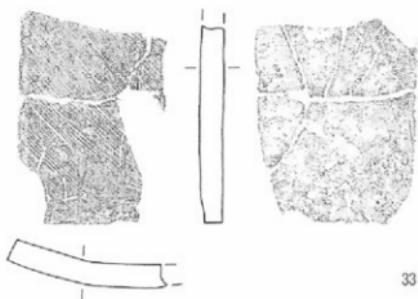
31

0 10cm

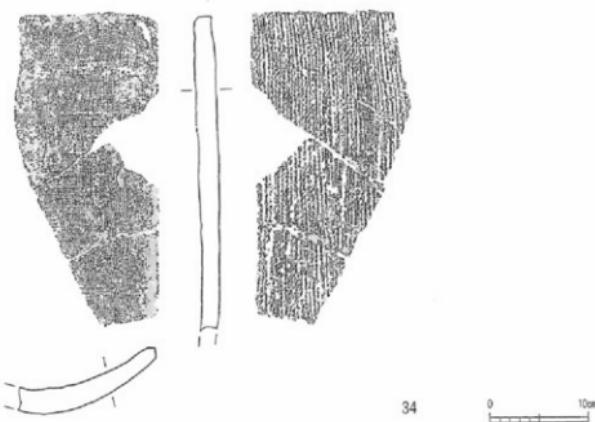
第19図 灰原1号出土平瓦



32



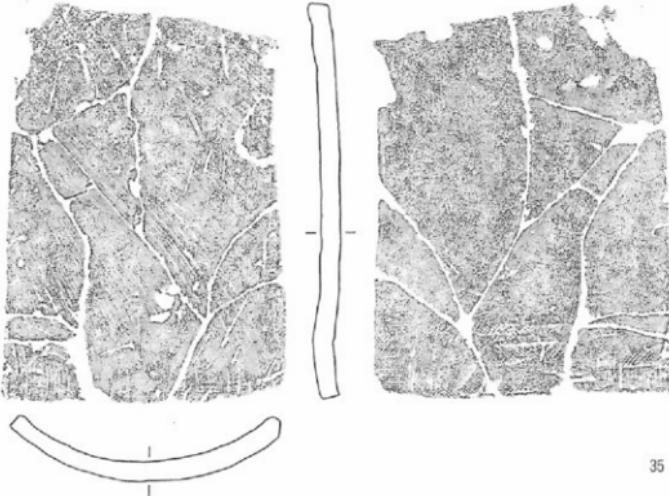
33



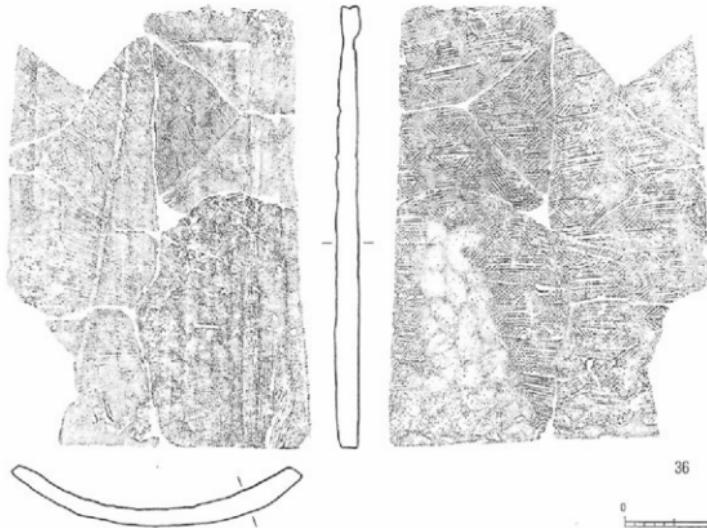
34

0 10cm

第20圖 灰原1號出土平瓦(32,33)、灰原2號出土平瓦(34)

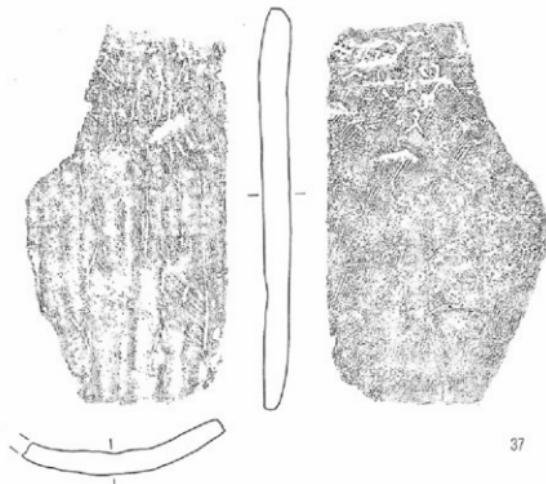


35

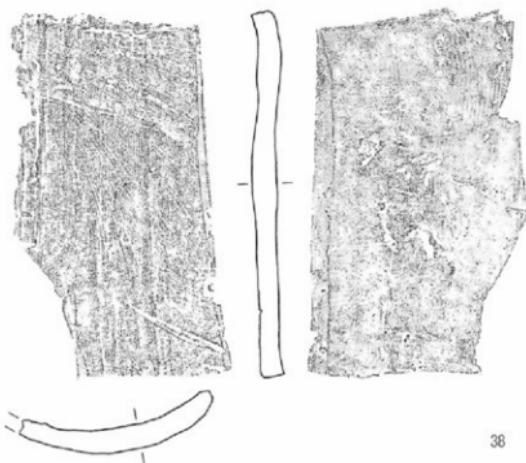


36

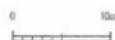
第21図 2号住出土平瓦



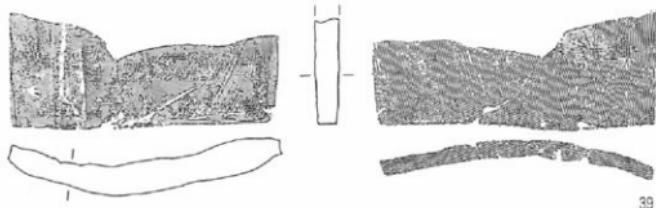
37



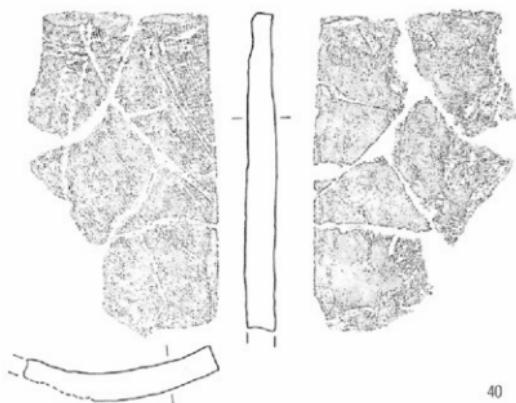
38



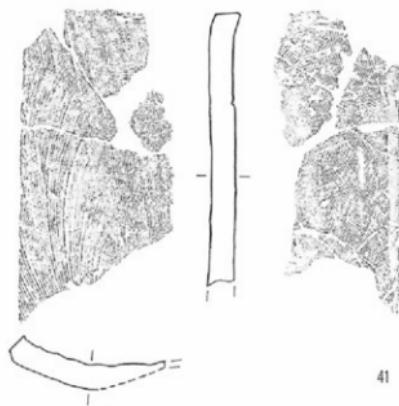
第22図 2号住出土平瓦



39



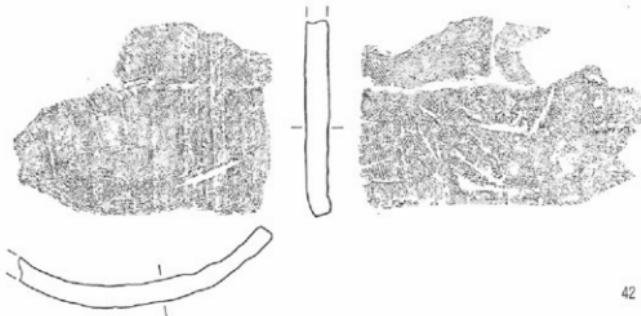
40



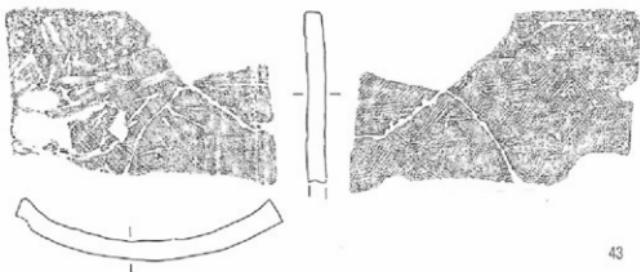
41



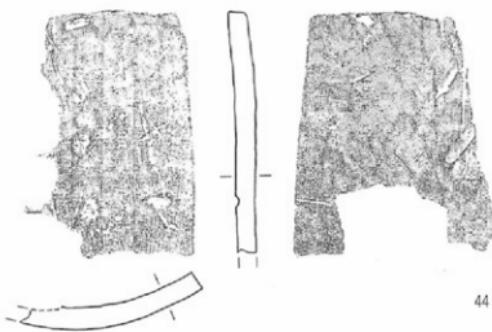
第23圖 2号住出土平瓦



42



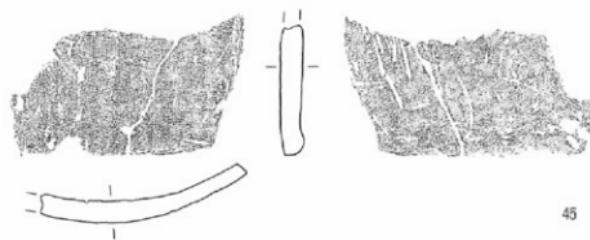
43



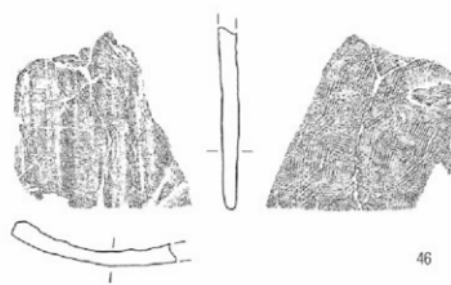
44



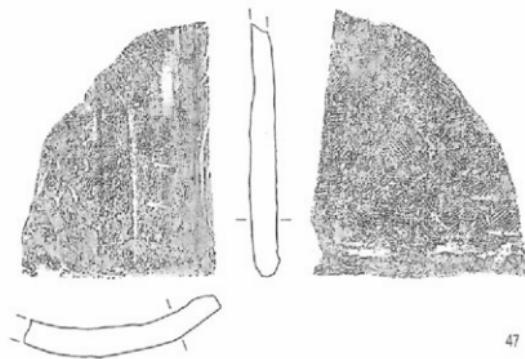
第24図 2号住出土平瓦



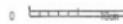
45



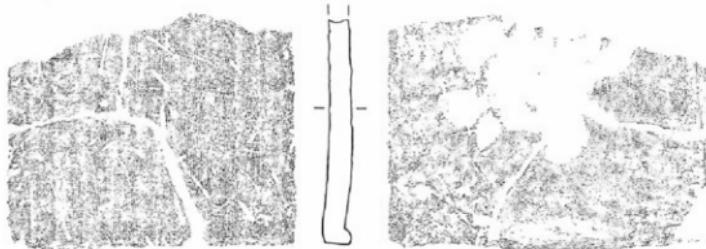
46



47



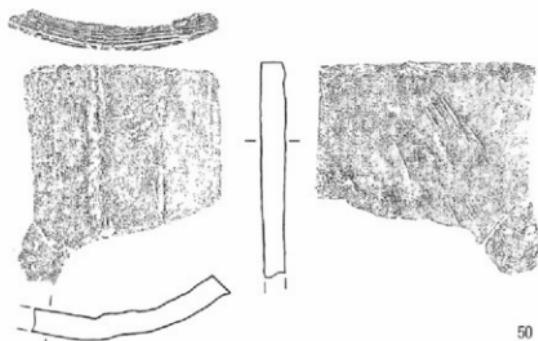
第25図 2号住出土平瓦



48

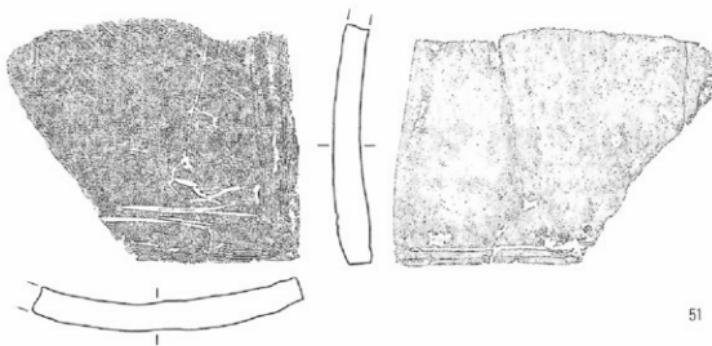


49

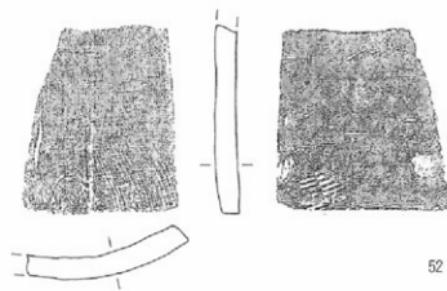


50 0 10cm

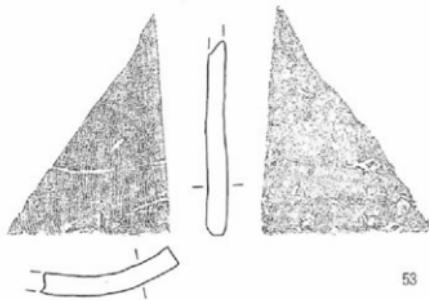
第26図 C地区出土平瓦



51



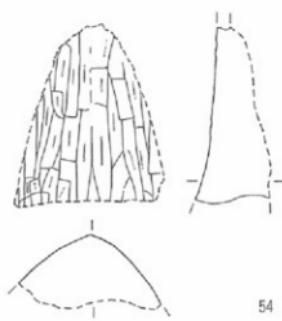
52



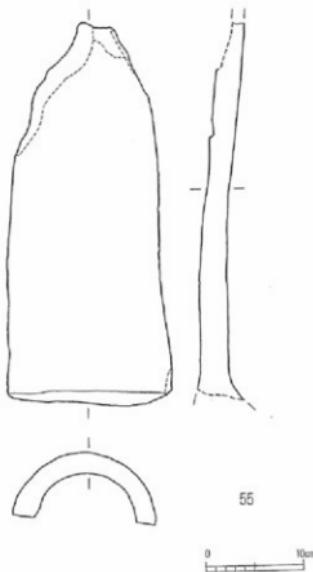
53



第27図 C地区出土平瓦



54



55

第28図 1号住出土鶴尾（54），窯出土軒丸瓦（55）

3. 出土土器（第29・30図）

今回出土土器はほとんどが須恵器であるが、ほとんどが不良品であるため、中には土師器のような形状を示すものもある。割れたり大きく変形した個体が多く、図示できるものは多くない。

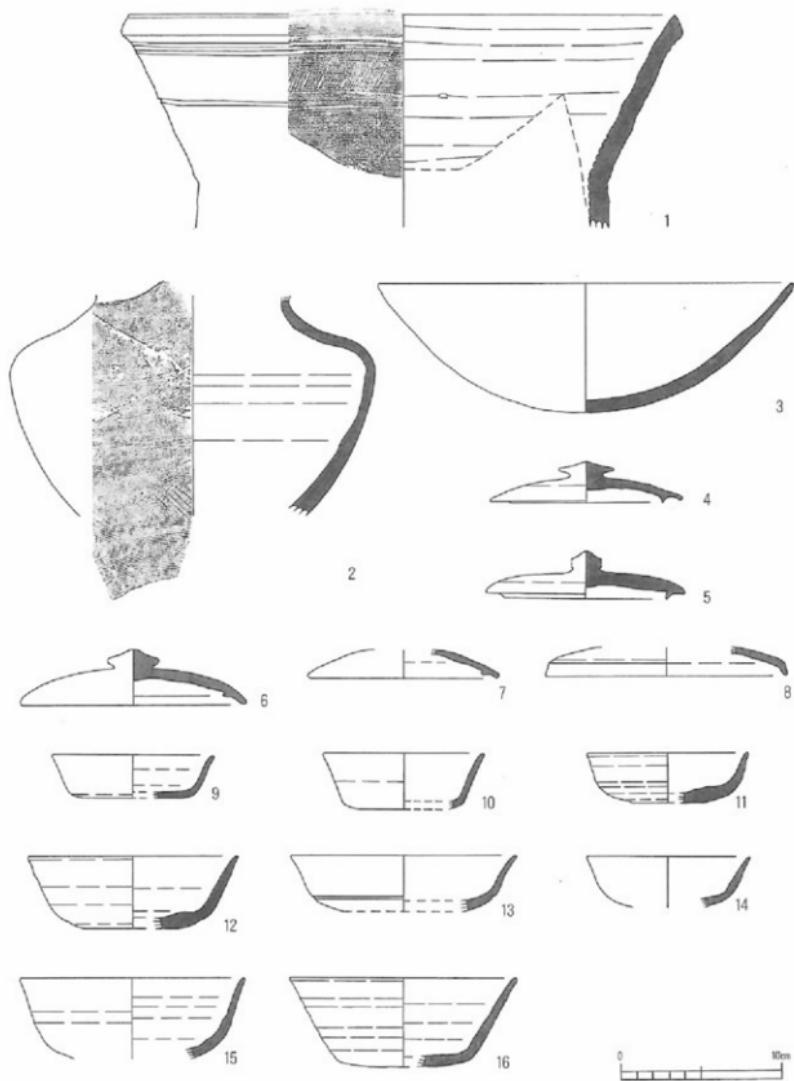
この窯で使用する粘土は、第三紀層の砂岩・泥岩の風化したこの付近の地下に豊富にある粘土を使用している。つい最近までこのあたりで屋根瓦の製造を行っていた方から、こここの粘土は耐火度が低く、長く高温で焼成すると「カルメ焼」のように発泡して膨らんでしまい良い瓦が作れないということを聞いている。今回の調査でも「カルメ焼」のようになった須恵器や瓦がたくさん出ており、この窯の特徴となっている。明科廃寺の既出遺物にもこの特徴を持つ瓦などが見られることも、この窯が明科廃寺の瓦窯であることの証となっている。

今回の調査で出土した須恵器は、食膳具としては杯A、杯B、杯蓋A、杯蓋Bが主で、僅かに高杯、杯Dが見られる。貯蔵具として甕、長頸甕、短頸甕、横瓶などである。この窯の操業時期は、杯Dが僅かに残り、かえりを持つ杯蓋Aがかなりの割合で見られること、かえりのない比較的大型の杯蓋Bなどが主となる2号住の須恵器などから7世紀後半から8世紀初頭の操業と推定される。

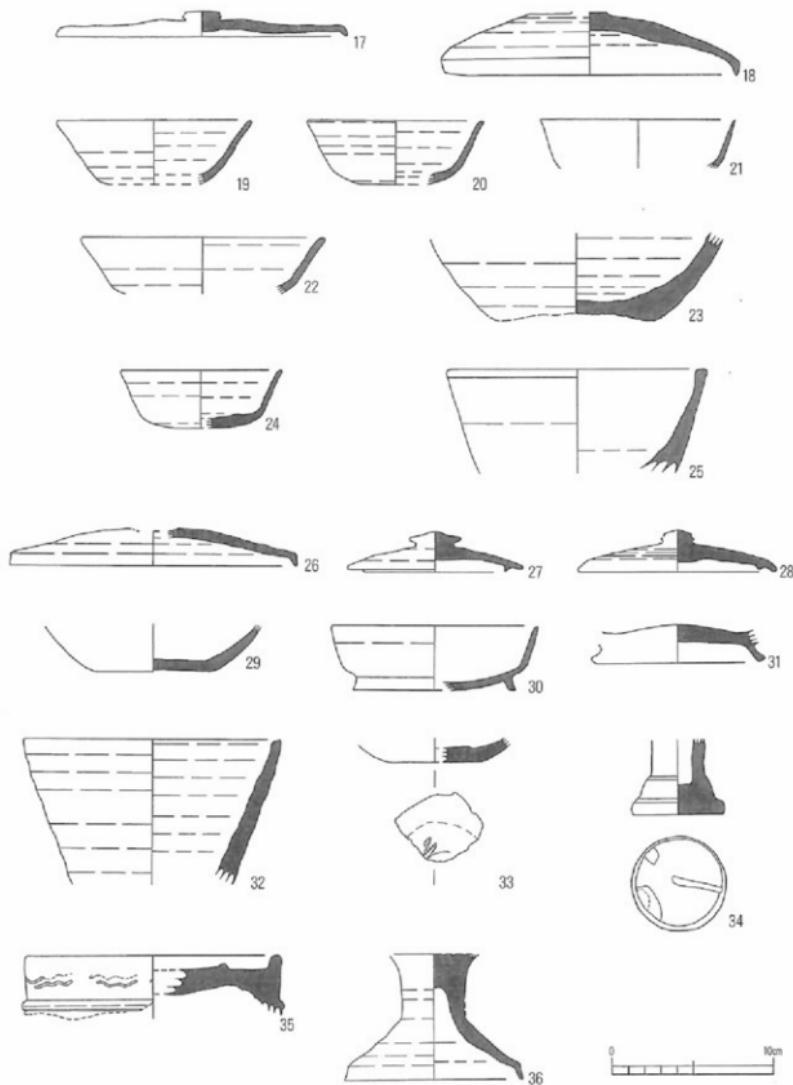
このほかに特徴的な遺物として鶴尾（第28図54）、円面鏡（第30図35）などの古代寺院の窯址らしい遺物も出土している。

唯一の文字資料として杯Aの底部に「足」（推定）と読める刻書土器（第30図33）がある。

36は、調査中に地元の方から寄贈された、宮原古窯址出土の高杯の脚部である。透かしではなく、短脚で全体を回転ヘラケズリで整形している。時期は桜坂古窯址と大差のない時期と思われる。



第29図 1号住出土遺物（1～3） 2号住出土遺物（4～16）



第30図 灰原1号出土遺物(17~23) 灰原2号出土遺物(24,25)
C地区出土遺物(26~34) 2号住出土遺物(35) 宮原古窯址出土遺物(36)

板倉古窯址出土土器総観察一覧表

()は推定値

No.	造形	種別	器 形	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土	施成	色 調	残存状況	調 研		()は推定値	説 明	
											外 壁	内 壁			
1	1号住	須恵器	壺	(34.0)	(13.4)		密	良好	明黒灰色	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	1号住 西側遺物集中区 中区段辺 カク乳アト		
2	1号住	須恵器	短頸壺	(12.0)	(8.8)		密	良好	褐灰色	1/3	タタキ ロクロナデ	ロクロナデ	1号住 北遺物集中区 東北遺物集中区 西側		
3	1号住	須恵器	鉢(?)	(28.0)	(8.15)		密	不良	にぶい黄褐色	1/2				1号住 №19-2 S地区西側	
4	2号住	須恵器	壺	(12.0)	2.6	やや粗い 白磁粒含	良	褐灰色	1/3	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	0-8-6			
5	2号住	須恵器	壺	(12.0)	3.0	やや粗い 白磁粒含	良	灰白色	1/3	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B-6-5 日-9-13 壁穴2内		自然難かれる	
6	2号住	須恵器	壺	(14.0)	3.5	やや粗い 白磁粒含	良	黒灰色	1/3	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B-6-4 壁穴フク土 I 層			
7	2号住	須恵器	壺	(12.0)	(1.8)		密	良好	黒灰色	1/4	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	C-8-6		
8	2号住	須恵器	壺	(15.0)	(1.8)	白磁粒含	良好	黒灰色	1/6	回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B-6-3 壁穴フク土 I 層 2号住底 B-6-4			
9	2号住	須恵器	杯	(10.0)	2.7	(6.0)	密	良好	黒灰色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	C-5-22, 6-2 I 層		
10	2号住	須恵器	杯	(10.0)	(3.5)	やや粗い	良	黒灰色	1/7	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	A-2西壁セクション 中			
11	2号住	須恵器	杯	(10.0)	3.1	(4.4)	密	良好	暗褐色	1/2	ロクロナデ ヘラ切り	ロクロナデ	B-6-3 壁穴フク土褐色土		
12	2号住	須恵器	杯	(12.0)	4.5	(6.0)	密	良好	黒灰色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	B-6-3 B-6-13		
13	2号住	須恵器	杯	(14.0)	(3.5)		密	良	灰黃褐色	1/5	ロクロナデ ヘラ切り	ロクロナデ	B-5-21.22集石下面		
14	2号住	須恵器	杯	(10.0)	(3.0)		密	不良	にぶい黄褐色	1/5			B-6-4 壁穴フク土 I 層	器面荒れ	
15	2号住	須恵器	杯	(14.0)	(5.0)	粗い 白磁粒含	良	灰白色	1/5	ロクロナデ	ロクロナデ	2号住 №5 B-6-9.10			
16	2号住	須恵器	杯	(14.0)	5.5	(4.4)	密 白磁粒含	良好	灰白色	1/7	ロクロナデ 回転ヘラ切り	ロクロナデ	2号住カマド周辺 B-6-3		
17	灰原1号	須恵器	壺	(18.0)	1.6	やや粗い 白磁粒含	不良	にぶい黄褐色	1/2	回転ヘラケズリ		B-7-8 黒土			
18	灰原1号	須恵器	壺	18.5	(3.9)		密	不良	褐色	4/5	ロクロナデ 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	B-7-8 B-7-13	墨ツマ無し	
19	灰原1号	須恵器	杯	(12.0)	(4.0)		密	不良	灰色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	B-7-9		
20	灰原1号	須恵器	杯	(11.0)	(4.0)	白磁粒少含	不良	灰色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	B-7-8 黑土, B-7-17	過濾集中区		
21	灰原1号	須恵器	杯	(12.0)	(3.0)		密	良	暗褐色	1/7	ロクロナデ	ロクロナデ	B-6-21包合層上面		
22	灰原1号	須恵器	杯	(15.0)	(3.5)		密	良	灰色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	B-7-18灰原1号 I 層 B-7-22付近 過濾集中区		
23	灰原1号	須恵器	鉢(?)	(5.5)		やや粗い 白磁粒含	不良	灰白色	底部のみ	ヘラケズリ	ロクロナデ	B-7-23 灰原1号 壁褐色土			
24	灰原2号	須恵器	杯	(10.0)	3.6	(3.2)	密	良	黄灰色	1/5	ロクロナデ ヘラ切り	ロクロナデ	B-5-4.5 遷出集中区		
25	灰原2号付近	須恵器	鉢	(16.0)	(6.5)	やや粗い	不良	灰白色	1/4		ロクロナデ	B-5-25 C-5-21 付近 I 層			
26	C地区	須恵器	壺	(18.0)	(2.3)	やや粗い 白磁粒含	良	黄灰色	1/7	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	B-7-2 黒土			
27	C地区	須恵器	壺	(11.0)	2.5	やや粗い	良	黄灰色	1/3	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	C地点			
28	C地区	須恵器	壺	(12.4)	2.6	やや粗い 白磁粒含	不 良	黒灰色	1/3	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	B-6-19 I 層 C-6-20 II 層 164			
29	C地区	須恵器	杯?	(3.0)	(7.2)	やや粗い	良好	黒灰色	1/3	ロクロナデ 回転ホリ	ロクロナデ	B-7-6 I 層 C-7-11 I 層			
30	C地区	須恵器	杯	(12.0)	4.0	(10.0)	密	良好	黄灰色	1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	B-7-12 I 層 C-7-14 I 層 C-7-14 II 層		
31	C地区	須恵器	長颈壺?	(2.4)	(10.6)	やや粗い 白磁粒含	良	黒灰色	底部のみ	ヘラケズリ	ロクロナデ	B-7-4			
32	C地区	須恵器	鉢	(16.0)	(9.0)	粗い 白磁粒多含	良	にぶい黄褐色	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	B-7-12 №110 C-7-14 C-7-14 I 層 O-7-19 (すり鉢?)			
33	C地区	須恵器	杯			(8.0)	密	良	黄灰色		ナデ	ロクロナデ	B-7-7 I 層 刻畫土器		
34	C地区	須恵器	?		(4.7)	5.8	粗い	不良	にぶい黄褐色				B-7-3		
35	2号住	須恵器	円筒壺	(15.0)	(3.7)		粗い	不良	黄灰色	1/4	ナデ	ロクロナデ	B-5-2号住 B-5-24 2号住		

第4章　まとめ

明科町は松本平の北部である安曇野の東北隅に位置し、標高は530mと最も低く松本平を流れる水（南から梓川・奈良井川、北から高瀬川、西から穂高川）がすべて集まり、善光寺平に向けて峡谷地形をつくりながら流れ下る。弥生時代後期には集落が営まれ、以降連続と人々の暮らしの場となっている。明科の地は現在では東筑摩郡となっているが、古代においてはおそらく安曇郡に属していたと思われ、前科郷に含まれていたものと考えられている。（倉科明正『明科町史』上巻第2章古代）

犀川・高瀬川・穂高川の三川合流地点を望む犀川右岸河岸段丘上には7世紀後半から8世紀初頭にかけての白鳳時代創建が推定される古代寺院明科廃寺址が存在する。

古代寺院の数は圧倒的に幾内が多く、7世紀中頃から末にかけて一斉に創建され9~10世紀には廃絶する例が多いといわれる。規模は方1町から1.5町四方に七堂伽藍を巡らす本格的な寺院で、ビジュアル的要素が強くかつ氏族寺院である事から氏族の政治的権力を誇示する目的で建立が進められた事が考えられ、『日本書紀』天武14年紀には「諸國に、家毎に仏舎を作りて、乃ち仏像及び經を置きて、礼拝供養せよ」との記述が見られ、律令国家の政策としての後押しもあったものと思われる。寺院の建立には測量・建築・造瓦など多種多様な知識と技術が必要で、在地の氏族にとつてこれらの知識・技術を得るために中央政権からの技術者集団派遣以外は考えられず、材料の提供や資金・労働力は在地氏族の負担であったことから、明科廃寺を造った有力氏族は当時の中央政権とかなり密接な関係を持ちかつ富の蓄積も強大であったものと考えられる。

桜坂古窯址は、古窯址としてその存在を知られていたが、操業時期が平安時代をさかのばらないとされ、明科廃寺の増改築や屋根瓦の修繕に窯が利用されたとされてきた。（三好博喜『明科町史』上巻第1章考古）今回の調査で、桜坂古窯址の操業時期は、古墳時代からの伝統的な杯である杯Dが僅かに残ることやかえりを持つ杯蓋Aがかなりの割合で見られることなどから、遅くも7世紀第4四半世紀には開始されており、終期は2号住居出土の須恵器にかえりのない比較的大型の杯蓋Bが主体となることから7世紀末から8世紀初頭とみられ、操業時期は極めて短時間であると思われる。明科廃寺のための瓦の窯として営まれたことは確かであるので、明科廃寺の創建時期を探る大きな手がかりになるのではないか。今回出土した軒丸瓦、軒平瓦が第二形式を除くと、明科廃寺の既出遺物にないことを考慮すると、短期の操業は特定の伽藍のための瓦窯である可能性も考えられる。また鷲尾も焼かれていること、軒平瓦が四重弧文の精緻なつくりであることなどから、この窯の製品が廃寺の未調査の中心伽藍である金堂や塔、講堂などの建物に使われたことが想定されるが、明科廃寺の伽藍配置が不明であり、廃寺第2次調査の地点が廃寺の伽藍のどこに当たるかも不明であるので、想像の域を出ない。廃寺の本格的な調査が待たれる。

今回の調査で、明科廃寺の既出の軒瓦と異なる瓦が出土したことは大きな成果であったが、廃寺で主となる第一形式第1、2類の軒丸瓦や、三重弧文や唐草文軒平瓦がどこで焼かれたのかは謎として残った。東筑摩郡誌では塙川原部落の南に2基の窯址があると記されており、今回調査した窯はこれと異なる可能性もある。調査中に付近をくまなく踏査したが、現況は竹藪や荒地であったりして窯の痕跡や遺物を確認することが出来なかった。また、北方約300mほどにある宮原古窯址群では、従前は僅かに布目瓦が採集されているばかりで、7基ある（三好博喜『明科町史』上巻）とされる窯の正確な位置が確認できていない。今回の調査時にたまたま宮原古窯址出土の高杯の脚（第

30図36）を地元の方からいただき、ほぼ同じ時期であろうと推定されるが、今後この付近の徹底した調査が不可欠であろう。

また、四賀村斎田原古窯址など付近の桜坂古窯址に続く時期の操業といわれる窯址との関連についても検討が必要である。いずれにしても、明科廃寺の軒丸瓦の多くを占める第一形式第1類・2類をはじめ桜坂古窯址で焼成された以外の瓦類の焼かれた窯を早期に特定することが求められる。

軒丸瓦の製作にかかる接合方法についても、第一形式第1類・2類は丸瓦との接合が一本作りと呼ばれる特殊な接合法であることが知られていたが、今回出土の第一形式第4類は接着法による接合、第二形式と第三形式は嵌め込み式であることが明らかになった。一本作り法は滋賀県南志賀廃寺とその焼成窯である榎木原瓦窯がその初現で大津京の時期に始まったとされる。明科廃寺出土の第一形式軒丸瓦には瓦当裏面に布目痕が残るが、南志賀廃寺のような布の絞り目の痕跡は見られない。また、「1条のすき間」といわれる丸瓦と瓦当との接合痕も見られない。このことから一本作りの技法に違いがあるものと思われるが、技法の詳細な復元と、接合方法の推移などの詳細な検討は今後の課題としている。

今回は充分な整理期間が取れずに、瓦類の整理分類が不十分なままの報告であった。いずれ明科廃寺出土の瓦と併せて詳細な整理を行いたい。



1



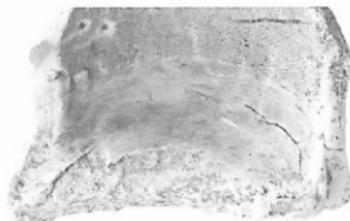
4



2



3

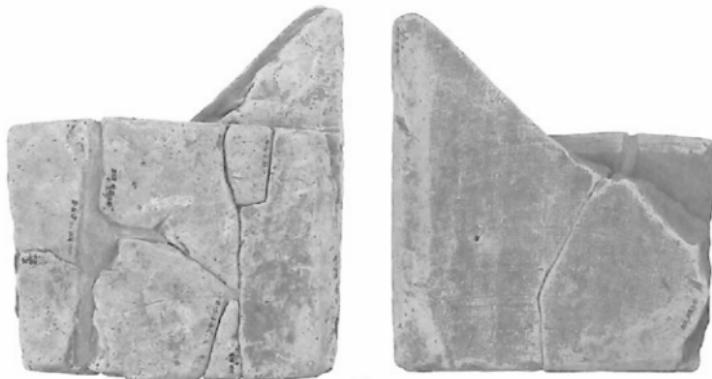


6





7



10

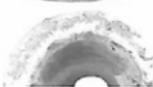




15



16



19



20



24

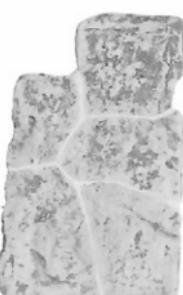


26





27



29



30



35



36



49



49



52



50

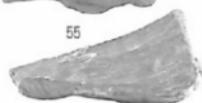


53

50



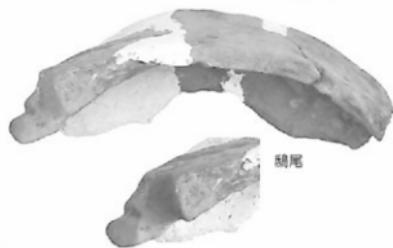
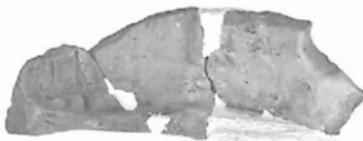
55



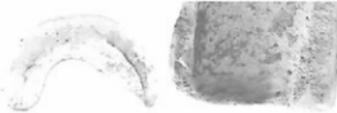
土36



土35



猪尾



55

① 速景（明科上郷より）



② 近景（県道より）



③ 遺構全景（南側より）

手前 3号住
奥 2号住



④ 遺構全景（北側より）



⑤ 2号住
遺物出土状況



⑥ 2号住 完掘

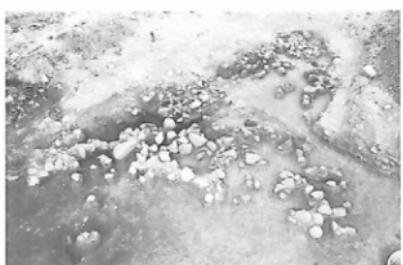




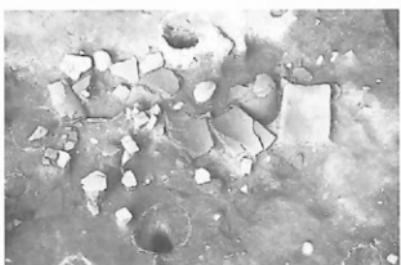
⑦ 1号住 遺物出土状況



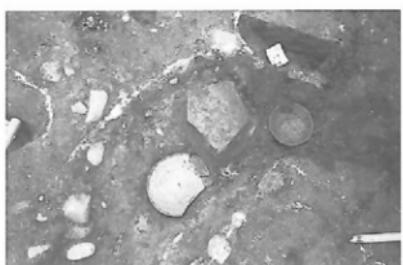
⑧ 1号住 完掘



⑨ 2号住 上部集石



⑩ 2号住 遺物出土状況



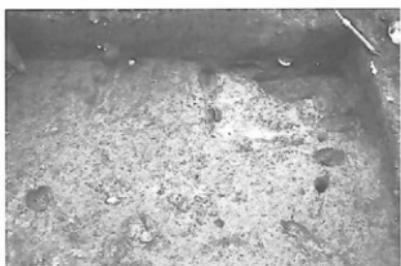
⑪ 2号住 周溝内遺物出土状況



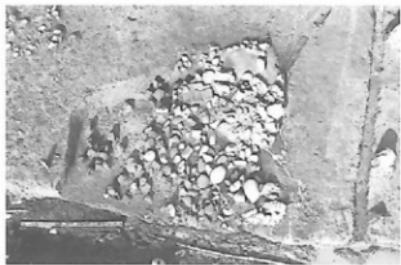
⑫ 2号住 カマド



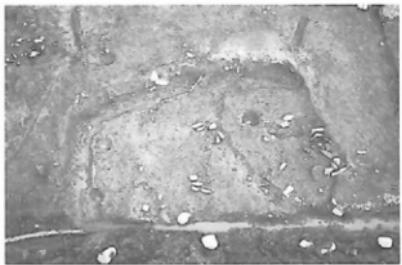
⑬ 2号住 排水施設



⑭ 縱穴状構造



⑯ 3号住 1号灰原に覆われている



⑰ 3号住 完掘



⑮ 3号住 カマド



⑯ 2号灰原



⑯ 2号灰原



⑰ 軒丸瓦出土状況



21 1号火葬墓



22 2号火葬墓

報告書抄録

ふりがな	さくらざかこようし
書名	桜坂古窯址
副書名	主要地方道徳高明科線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	明科町の埋蔵文化財
シリーズ番号	第5集
編著者名	大澤哲
編集機関	明科町教育委員会
所在地	〒399-7102 長野県東筑摩郡明科町大字中川手 6824-1 ☎ (0263) 62-3001
発行年月日	1998年3月25日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調面積積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
桜坂古窯址	長野県東筑摩郡明科町 大字七貴 墓川原	20241	212	36° 21' 59"	137° 55' 16"	1997.09.09 ~ 1997.12.09	310 m ²	主要地方 道徳高明 科線道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
桜坂古窯址	古窯址	古墳 奈良	窯址灰原2 竪穴住居3軒 墓塚2基		須恵器 瓦		明科廃寺創建時の瓦窯址を 検出	

明科町の埋蔵文化財 第5集

桜坂古窯址

—主要地方道徳高明科線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告—

平成10年3月25日発行

編集・発行 明科町教育委員会

長野県東筑摩郡明科町大字中川手 6824-1

印刷 アカシナ印刷

長野県東筑摩郡明科町大字東川手 847